【樹木の部屋】

ヒイラギナンテン（メギ科メギ属　Berberis japonica）

和名：ヒイラギナンテン(柊南天)　別名：トウナンテン(唐南天)

英名：Japanese mahonia

キンポウゲ目　常緑低木　　原産地：台湾、ヒマラヤ～中国

花言葉：激しい感情、激情、愛情は増すばかり　　花色：黄

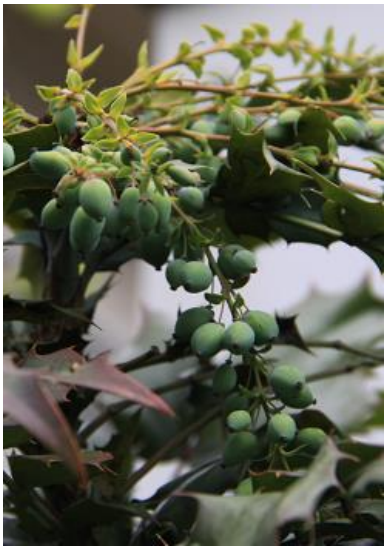
← 写真-１　ヒイラギナンテン
撮影日：2020 年 4 月 25 日
撮影場所：八幡市(京都府)市内にて
撮影者：M　さん

↘ 写真-２　ヒイラギナンテンの幹肌
撮影日：2020 年 4 月 25 日
撮影場所：八幡市(京都府)市内にて
撮影者：M　さん

← 写真-３　ヒイラギナンテンの葉
撮影日：2021 年 4 月 19 日
撮影場所：大和郡山市郊外にて
撮影者：M　さん

← 写真-４　ヒイラギナンテンの花
撮影日：2021 年 2 月 20 日
撮影場所：大和郡山市郊外にて
撮影者：Ｍ　さん

→ 写真-５　ヒイラギナンテンの新芽
撮影日：2020 年 5 月 1 日
撮影場所：大和郡山市郊外にて
撮影者：Ｍ　さん



→ 写真-６　ヒイラギナンテンの幼果
撮影日：2020 年 4 月 19 日
撮影場所：大和郡山市郊外にて
撮影者：Ｍ　さん

ヒイラギナンテンは、庭に植えられているのをよく見かける植物です。常緑で濃い緑色の葉、早春に長い花穂に多数つく(総状花序)黄色い花、初夏に熟す黒青色で粉を吹いた果実と、1 年を通じて観賞できる植物です。庭の和洋を問わずマッチし、生け垣にも利用することができます。また、剪定によってコンパクトにまとまり、狭い場所でも楽しむことができます。

和名は葉がナンテンのように複葉で、ヒイラギのようにとげのあることや、果実のつき方がナンテンに似ることに由来しているそうです。学名が japonica(ヤポニカ：日本の)であるために、日本原産の植物と思われがちですが、じつは中国原産で江戸時代初期に渡来たそうです。

開花時に、雌蕊に触れると、その外側にある 6 本の雄蕊が雌蕊の方向に動く様子が観察できます。これは、花に昆虫が訪れると、自然に昆虫の体に花粉を付着させて、ほかの花へと運ばせるためだと考えられるそうです。

葉は奇数羽状複葉で互生し、小葉は硬く、ヒイラギの葉に似て鋸歯は刺になります。常緑で落葉はしませんが、冬に赤銅色になる部分があり、紅葉のようになります。

ヒイラギナンテンの材には薬用成分「ベルベリン」等が含まれ、これを煎じて飲め

ば扁桃炎や口内炎に効くとする民間療法があるそうです。幹の断面が黄色いのはこのためで、噛めば苦い味がし、幹は古くなるとコルクのような樹皮で覆われます。
　日陰に強く、日向でも育ちますが、日差しが強すぎると葉の緑色が薄くなるため、直射日光を避けると葉色が美しく保てるそうです。刈り込むような手入れは不適切で、不要枝を切り取る程度で、ある程度、葉の数を減らして空間を作る必要があります。成長は遅いため、よほど狭い場所に植えない限りは扱いに困るようなことはないと思います。

＜ちょっと一言＞

＊ヒイラギナンテンは、これまではメギ属の近縁とされながら、複葉（メギ属は単葉）で幹にとげがない（メギ属にはとげがある）点が異なるために、マホニア属とされてきましたが、近年の研究によってメギ属に含まれることが明らかになったそうです。